

☑ 出国する前に気をつけること

〈海外の学校選択 どのような学校に通わせるか〉

1. 学校の主な種類 公益財団法人 海外子女教育振興財団(以下JOES)HP参照

海外に住む日本人の子どものための全日制在外教育施設は、日本人学校、私立在外教育施設に分類される。

- a. **日本人学校** 日本国内の小・中学校と同等の教育を行う目的で文部科学大臣が認定した学校(上海には高校も設立されている)。一般に現地の日本人会等が主体となって設立され、国内と同等の教科書を使用し、日本からの派遣教員による指導が行われる。世界各地に94校ある(休校、閉校予定の学校も含む)。
- b. **私立在外教育施設** 主として日本国内の学校法人が海外に設置した、文部科学大臣が認定した学校。
世界に7校(2022年度より如水館バンコクは募集停止)

上記a、bに通学しない場合は、下記cまたはdの学校に通学し、併せてeに通うことが多い。

- c. **現地校** 所在国政府等が学校として認めた現地教育施設。現地語で教育する。
- d. **インター校** 所在国に設置された外国人学校でインターナショナルスクールと呼ばれる。主にアメリカ系、イギリス系、国際系(International Baccalaureate)があり、それぞれ異なる教育制度を持つ。教育活動評価団体(WASC、CIS、ACSI等)への加盟や、IBコース等の設置が信頼の目安。費用は高額。
- e. **補習授業校** 土曜日や平日の放課後などを利用して、日本国内の学校で学ぶ国語・算数などを学習するための教育施設。世界各地に230校ある(休校、閉校予定の学校も含む)。

2. 学校選びのポイント

上記a～dの中から学校を選択するが、e補習授業校や通信教育などを利用し、日本の学習をフォローアップすることが望ましい。いずれの学校も出国前に空き状況を確認して、事前に編入・入学準備を進める必要がある。学校選択には現地の教育事情、使用言語、また、下記の点に留意するとよい。

- ・ 出国時の子どもの学年、滞在期間、帰国時の学齢。家庭の教育方針(どのような子どもに育てたいか)。
- ・ 子どもの性格・能力を考えた上で、適正な教育施設を選択する。
- ・ 現地校・インター校を選択する際、家庭で子どもの学習支援体制は整えられるかどうか。
- ・ インター校を選択する際は、進学のためのカリキュラムが整えられ、卒業資格を得ることの可能な認可校かどうか確認が必要。JOESの教育相談を受けると確認してもらえる。
- ・ 帰国後の進学や受験を考える際に、受験資格などの問題が生じないかどうか。高校受験の場合は、Grade 9(Year 10)、大学受験では、Grade 12(Year 13)の課程を修了または修了見込みでなければ受験資格を取得できないこともある。
- ・ 大学受験の際の留意点 (本誌「大学入試基礎知識」の項参照)

滞在国で高校相当の教育課程を修了し、その国の大学受験資格を認定されるためには、滞在国の統一試験を受験して、基準のスコアをおさめる必要がある。日本の大学の帰国生入試を受ける際にも、高校相当の教育課程を修了し、滞在国の統一試験のスコアを提出するよう要求する大学もある。また、IBの教育課程を実施する学校などで、高校相当の教育課程であるDP(Diploma Programme)を修了した場合は、修了試験と必須提出課題の結果によってIBのディプロマが授与され、その認定をもって大学への入学資格と認められる。

※IB(International Baccalaureate)について

国際的な教育プログラムで、初等教育(PYP)・中等教育(MYP)・ディプロマ資格(DP)の3段階からなる。IBDP取得のためには、最終2学年の教育課程において、選択科目・卒業論文・「知識の理論」・教科外活動が課せられる。選択科目6分野のうち、上級レベルを3～4科目、標準レベルを2～3科目履修することになる。これまで公式使用言語は英語、仏語、スペイン語であったが(一部独語、中国語も可)、2016年度からは一部日本語使用も認められている。IBDPスコアは、国独自の教育制度に依存せず、世界各国で大学入学資格として認定されている。

3. 日本語保持への留意

- ・ 日本語がまだ十分に確立されていない幼児や低学年の児童が現地の教育施設やインター校を選択する際は、母語(日本語)の保持に留意することが大切である。母語は考える力の軸であり、子どもの心の発達や思春期におけるアイデンティティの確立など、人間形成に大きな影響を及ぼす。家庭では正しい日本語を使用し、できるだけ日本語に触れ

る習慣を作るなど、日常生活の配慮が欠かせない。

- ・日本語で保育を行っている幼児教育施設については、JOESの教育相談に問い合わせること。幼児向け母語保持の通信教育等の利用も有効である。本なども十分に持参することが望ましい。

《出国前にしておくこと》

1. 転校、入学の準備

出国が決まったら、通っている学校の担任に伝え、海外の学校への転校、入学に必要な書類を学校で準備してもらう。

- ・日本人学校に入るための必要書類 在学証明書、成績証明書、健康診断書、歯の検査表(日本国内での転校と同じ)。
- ・現地校・インター校に入るための必要書類 **英文の在学証明書、英文の成績証明書、母子手帳の予防接種履歴の英訳**
※英文の証明書 決まったフォームはない。学校でフォームが準備できない際は、JOES作成のフォームを購入可。
- ・補習授業校に入るための必要書類 成績表の写し、パスポートの写し。

2. 日本の教科書の受け取り

海外に1年以上在留することを予定した日本国籍を持つ学齢児童・生徒は、教科書無償配付の対象となる。出国の2カ月前(コロナ禍により現時点では1カ月前)から配布可能で、通っている学校から**転学児童・生徒教科用図書給与証明書(以下 教科書給与証明書)**を入手しておく。

- ・現地到着時期に使用する教科書を受け取るには、JOESのHPからメール、または電話で申し込む。送料・手数料負担の上、宅配で受け取ることができる。書類のやり取りが必要となるため2週間以上の日数の余裕をもって申し込む。
- ・受領する教科書は渡航時期によって異なる。特に**後期の教科書が入荷する6月、次年度の教科書が入荷する11月に出国する際は、事前にJOESのHPで入荷状況を確認し受領の時期を判断すること。**
- ・次年度4月に新小学1年になり、本年度11月以降、新年度入学までに出国する場合、4月から使用する教科書を受け取ってから**渡航する**。その際、教科書給与証明書は不要。また、次年度4月に新中学1年になり、本年度中に出国しても3月以降4月の入学までに出国する場合、教科書給与証明書は必要ない(ただし、3月中に1日でも渡航先の日本人学校に通学を希望する際は教科書給与証明書が必要となる)。
- ・教科書は再交付されないので注意する。
- ・渡航後の教科書は現地で手配されるので、日本領事館などの管轄の在外公館で受領方法を確認する。
- ・教科書の受領を忘れて渡航した場合、管轄の在外公館に申請し日本からの送料を自己負担すると現地受領可能。

【学校選択 保護者の声】※かけはしイベント参加者および会員を対象に行ったアンケートから抜粋

日本人学校

- ・子どもは帰国直前にコロナの状況と帰国後のことを考えて日本人学校に転校した。ニュージャージー日本人学校は一学年10人未満と規模が小さくアットホームな雰囲気だった。大変熱心な先生が多く、また驚くほど優秀な生徒ばかりで刺激を受けた。コロナ禍で現地校は生徒間の交流など出来なかったが、日本人学校では校外学習や運動会などの行事もあり楽しく過ごせた
- ・6月に現地のミドルスクールを卒業し8月から卒業まで中3の2~3学期を日本人学校に通う予定。2022年春に本帰国する。現地から日本の高校受験をするため、日本人学校に移った方がスムーズかなと思い決めた
- ・小学校までは、日本語の教育をと思い日本人学校を選択した。良かった点は、海外にしながら、日本語での勉強ができ、日本と変わらない生活を送りながら海外の文化を楽しむことができた
- ・滞在が3年で期間が短いことがわかっていたので帰国後スムーズに学校に行けることを優先。英語が上達する前に帰国したのが残念だが、日本語による学習は本人にとって安心できたことだと思う。日本人学校にいたといえども、異文化の中で生活し苦労したことには変わらない。日本とのギャップを感じ、帰国後は神経質になっていたかもしれない。特に日本の男子は、小学校高学年の時期、自転車で放課後遊んだり、ワイルドに遊びを展開したりすると思うが、それができる環境ではなかったため、息子はいろいろな面でワテンポずれているように感じた
- ・海外にいるとリアルな受験情報が伝わってこないで、どのレベルであれば編入できるのかと(特に編入試験は過去問が発表されていないこともあり)心配していた。日本人学校なので、実力テストもあり偏差値や志望校の判定も出ていたが、テスト受験者の母集団が小さく信頼性に疑問があった。先生は全国から来られていて、子どもの志望校をご存じなかったので、親が様々な情報を集めて先生に相談した。かけはしの学校案内を何度も読み、気になる学校をピックアップしHPで調べた。評判をインターネット検索した上で何校かに連絡を取り、訪問して子ども自身が志望校を決定した。日本人学校の先生も編入試験のために面接練習に付き合ってくれ、細やかに指導してくださった

現地校

- シカゴ(近郊)の公立現地校は日本語と英語のデュアル教育だったため、毎日両方の言語を学べて大変良かった。長男は2度目のアメリカが7年生からだった。日常会話は全く問題なかったものの、学校のレベルが高かったことと学習内容も高度だったため、毎日の宿題を親子で一緒に教科書を解説しながら進めていた。理科や社会の内容は専門用語が多く、アメリカで教育を受けていない親の私たちにとっても大変だった。もし、はじめての海外がミドルスクールから、という状況にある方は、親の英語力と夜中まで宿題に付き合う覚悟を持って来ないと大変だと思う
- 現地校しかなかった。日本人も少ない地域だったが、ESL教室がとても充実しており低学年の次男は、数か月でESLの先生の話すことを理解することが可能になった。夏休みもESLの生徒対象の補習授業などもあり、長期の夏休み期間も英語の環境で生活できた。5年生で渡米した長男は、Elementaryに入ってから卒業式で、秋からはMiddle Schoolに進級というタイミングで、なじむのに苦労した。Middle SchoolもESL教室が充実しており、1日のうち数時間はESLで授業の補習や英語教育を受けられた。ESLのプログラムで一定の英語での学習能力に達するまで段階的に指導を受け、早ければ3年以内にはESLプログラムから卒業でき一般のクラスのみとなる。州の中でも上位の公立高校のある地域だったため、ESLも一般授業も教育水準が高いと感じ、ハイスクール卒業まで滞在した長男は、国内トップクラスの州立大学に数校合格できるまでの学力をつけることができた
- 駐在という限られた海外滞在期間、できるだけ普通に現地での生活をしたかったので、選びました。メリットは英語の力が自然とついたこと。ESOLが充実していたのも大変ありがたかったです。デメリットは、中学生、高校生となると、お友達を作るのが難しくなるかな、というところです
- 現地校には日本人がおらず、1年目は相談する人もなく困った。ボランティアに積極的に参加し、親も学校に慣れるよう努力した。2年目から要領も分かり困ることはなかった。学校生活ではアジア人に対し人種差別をする生徒が上級生にいたらしく、休憩時間に足を引っ掛けられたり、ランチタイムにはカフェテリアで言葉による嫌がらせも受けた。そのことは、1年たって我が子から聞き、子が出していたシグナル(ランチタイムに来てほしい)を単なる甘えだと思って見過ごしていたことが悔やまれた。現地校に通うと言語も行動も現地に染まっていきアメリカナイズされる子の姿に寂しさを覚えた。現地では日本語の保持に悩んだ
- 州でトップレベルの公立校で学力、課外活動共に充実した学校で良かった。駐在は8年におよび、長男は海外の大学もアプライし入学許可も出たが、駐在員にとっては米国の大学に進学するのは経済的に負担であり、留学生に比べ情報も少なく戸惑った。最終的に日本の大学を選択。帰国受験の情報は容易に収集できるが、海外に残る選択肢の場合、情報がもう少し入れば良いのと思った
- 子ども達が生まれた国の現地校に行くのが、自然な流れかと思った。幼稚園や保育所時代は言葉の壁もあったが、小学校に入る頃には馴染んで色んな国のルーツのお友達ができ、今でも連絡を取れている事は本当に良かった。日本で言う幼稚園年長の年がプレップ(preparatory)と言う。これは、1年間小学生と同じ様に、ユニフォームを着て小学校で過ごす。literacyとnumeracyを主に、言語(文字)と算数の基礎を遊びながら小学校で学べるのは、小学校入学時のストレスを減らせて良かったと思う

インター校

- 当初は言葉の壁があったが、少人数クラスの学校だったので直ぐに慣れた。2か国赴任したがどちらも短期だった。2か国目は1か国目と同じUKカリキュラムのインターナショナルスクールに入れたのでギャップは少なかった。両校ともものびのびと多角的に学ぶ機会があり、姉妹そろって同じ学校に通えたのは良かった(幼稚園児と小学生)
- インターで英語、スペイン語、カタルーニャ語の3か国語で授業があったのは良かった。東洋人の外見を幼稚園生からからかわれ、いじめ的なことを言われた。校長先生に対策も求めた。いろいろ大変だった
- 日本人学校も考えたが、海外生活をするならばインターをと思い選択した。良かった点は、小2という学齢の小さい間にネイティブの英語を学んだこと、大変だったのは、ゼロからのスタートで本人は授業や友人を作ることに苦労したこと。自分も英語が上手くないので苦労した。海外ではしゃべれないと存在がない様に扱われるので、受け身の息子は苦勞して性格を変えていったようだ。親の支援については、学校のプリント、参観、面談、季節のパーティーなどこなすのが大変だった。両親の支援が必要だと感じた。帰国後、日本の友人に溶け込めず、学校に相談に行った
- 小学校までは日本人学校を選択し、中学からは高校になっても家族で海外に住めるようにとインターを選択。インターでは英語力が伸びたのはもちろん、部活などを通じ友人を得て、日本では体験できない様々な事に挑戦できた
- 高校入学時まで駐在予定だったため、日本人学校が中学で終了するので、インターを選択。娘が14歳で、成長してからの2度目の赴任のため、滞在国に慣れるまで大変だった。滞在国に様々な教育方針の学校があり選択に迷った
- IBプログラムのインターに通った。40か国以上から集まる明るく自由な雰囲気の大規模校で、やりたいことにチャ

レンジでき、学校生活を積極的に楽しんだ。帰国後、高校受験の際G9を未修了の理由で帰国生受け入れ校にも都道府県の教育委員会にも受験資格をもらえなかった。高校入試に関する情報は事前にしっかり入手してほしい

補習授業校

- 補習校は、宿題も多く土曜日に終日あったため大変だったが、帰国した今、やっぱり頑張っていてよかったと思う
- いつか日本に帰ることは決まっているので日本語の読み書きを習っておいた方が良いと思って通った。土曜も学校なんて大変だと思ったが、低学年のうちには本当に楽しんで通ってくれた。また、本人も二つ学校に通っていることを誇りに思っていたようで良かった。困った点は、土曜の通学なので現地のコミュニティ催の野球やサッカーなどのスポーツとの両立が難しかったこと
- 日本人が少ない州だったので、現地で国際結婚された方々の子どもが多く駐在者の子どもは少なかった。学習指導要領に従って授業は進められたが、やはりアメリカ国内で育った児童・生徒との学力差(主に日本語能力の差)が著しく担任も苦勞されていた。結果、高学年に進むと続けられる児童・生徒が少なくなっていく状況だった。しかし、その環境でも、週に一回日本語で勉強でき、他の学校に通う友人と会うのが楽しみで、特に渡米直後は唯一の心の拠り所だったと長男は話している。そういった意味では、帰国後を視野に入れた学習の維持というより日本人としてのアイデンティティを保てる貴重な場所であり、保護者同士の情報交換の場であったと、感謝の気持ちでいっぱいだ
- 土曜日週1回の補習授業校であるが、子どもの日本語保持と上達にはなくてはならない環境だった。帰国後日本の学校の適応が補習校に通っていたことでずいぶんプラスになった。特に、起立、礼で授業を始めること、お弁当、教科書、漢字学習などに違和感なくすんだようだ
- 補習校が現地の先生を招いて参観と懇談の機会を作ってくれた。授業のようすに、現地校の担任は「低学年の子どもは、集中力が10分程度なのに、日本の子どもは45分も座っている！」と驚いていた。子どもにとって、先生が来てくださるのはこの上ない喜びであったほか現地の先生にも日本の学びを知っていただく貴重な機会だった

【海外に持って行ってよかった本】(出版社名略)

<生活用>

- 『海外子女教育手帳』(英語、日本語による自己紹介ノート。在学証明書、成績証明書フォームつき)
- 『サバイバルイングリッシュ』(海外子女教育振興財団 携行サイズ) ・世界史、西洋美術史の本
- 『はじめて出会う育児の百科』 ・ 『アメリカで困らないための本<健康・医療編>、<生活編>』
- 『アメリカで小児科にかかるとき』 ・ 『日英対訳 アメリカ医療ハンドブック』 ・ 旅行ガイドブック
- 定期購読『母の友』 ・ 電子辞書(学習用語を含むもの) ・ 英文メール、手紙の書き方 ・ 日常英会話本

<学習用>

- 『英語ナビ』(海外子女教育振興財団 小4~中3対象の算数、数学、理科の学習用語対訳集)
- 『小・中・高の理科がまるごとわかる』 ・ 『ものなまえずかん』 ・ 定期購読『かがくのとも』『こどものとも』
- 『かいけつゾロリ』シリーズ ・ 日本の歴史、世界の歴史(マンガ) ・ 各種図鑑 ・ 日本、世界の地図 ・ 各種マンガ

《まとめ》

赴任地における子どもの学校選択については迷う場合も多いと思う。日本人学校、現地校、インター校、いずれを選択する場合にも、帰国時期、進学などを視野に入れつつ、子どもの性格、能力などを考慮し、家庭で子どもの勉強を支援できるかどうかなど現状をよくふまえて総合的に判断することが望ましい。

日本人学校を選択する際は、指導内容や教育環境が日本の教育に準ずるので、環境の変化に伴う子どもの負担が軽減できるが、地域によってその規模も特色も大きく異なる。日本人の多い地域の大規模校では、教育レベルや帰国後の進学に高い関心を持つ保護者が多く文化交流にも力を入れている。しかし、現地の人や文化に触れたり言語を習得したりする機会が限定されるため、海外生活での豊かな体験を積むことができるように家庭での取り組みや配慮は欠かせない。

一方、現地校やインター校では、ごく自然な形で現地の子どものさまざまな国籍の子どもたちと日々交流することができる。日本人学校では得ることのできない貴重な経験や感覚、生きた外国語を身につけることができる環境と言える。しかし、子どもが学校に適応し、かつ外国語で学習する過程は、子どものみならず保護者にとっても負担となることが多い。特に、渡航時の子どもの学齢が高いほど本人の努力や家庭での支援が必要不可欠となる。また、上記の保護者アンケートにあるように、帰国後の高校受験の際には、受験資格が問題となるので、事前に情報を把握しておく必要がある。帰国後に逆カルチャーショックを感じ、適応に時間がかかる子どももいることも知っておくべきだろう。

学習言語は日常生活言語とは異なるものであり、学習言語として外国語を習得するにはかなりの年数を要する。学校のボリュームのある宿題などに加え、補習授業校や通信教育、塾などの日本の勉強も課せられるので、子どもには重圧

となる場合が多いようだ。しかし、将来日本の学校や大学に進学することを考えるならば、日本の学習もあきらめずに続ける必要がある。さらに、外国語をしっかりと身につけることができれば、日本での受験や就職の際、有利であることも多い。滞在が長期におよび、子どもが現地校やインター校で日本の高校相当の教育を受け、海外の大学や日本の大学の帰国枠受験を考える際は、それぞれの国の制度によって高校卒業認定資格、および大学受験資格となる統一テスト受験を視野に入れなくてはならない。また、世界各国で大学への入学資格として認められるIBのディプロマのような資格が必要となる。

いずれの学校選択にも長短があるので、滞在が長期間にわたることが予想される場合は特に、子どもの適性や長期的な視点に立って、よく考えて選択することが大切である。また、海外での異動が予想される場合は、同じ教育プログラムやカリキュラムを継続して受けられるように学校選択に留意する必要がある。父親が一足先に赴任する場合や転居前に出張で現地に出向く機会があれば、できるだけ学校訪問をするなどして、教育内容や雰囲気を把握しておく助けになる。

出国を考える際の注意点をJOESの教育アドバイザーの先生にお尋ねした。コロナ禍の状況や教育情報は国によって、また、出国の時期によって異なってくる。オンラインにより毎月開催している赴任前子女教育セミナー(無料)では、オンタイムで最新の情報を受講者に伝えているので、ぜひ、受講していただきたいとのことだ。出国準備の際には、いずれの国においても現地の直近の状況を会社の前任者や学校等から事前に情報収集し、編入予定の学校の授業形態が、対面かオンラインか等も確認することが大切だ。状況によっては、JOESの教育相談を受けるようにとお勧めいただいた。近年、教育相談もオンラインが人気とのことだ。

【公益財団法人 海外子女教育振興財団(JOES)のサービス内容について】

Eメール service@joes.or.jp TEL 03-4330-1341

出国前から帰国後まで

- ・専門の教育相談員による個別教育相談、最新情報の提供 ・国内、海外の学校説明会、相談会
- ・子どもと保護者向け刊行物の販売、月刊誌の発行 ・英文の成績証明書・在学証明書のフォーム販売

出国前

- ・赴任前子女教育セミナー ・渡航前配偶者講座、子ども英語教室(東京のみ)
- ・文部科学省から依頼を受けて、出国する子どもに日本の教科書を配付
- ・現地校入学のための親子教室(英語で教育を行っている学校に子どもを通わせる予定の家族対象)

滞在中

- ・海外子女のための通信教育。児童・生徒には日本の学習指導要領に沿った教材、幼児には日本語の絵本を届ける
- ・海外子女文芸作品コンクール

帰国後

- ・帰国子女のための外国語保持教室(英語・フランス語)

個別教育相談には出国前～帰国後にいたるまで、保護者からさまざまな相談が寄せられる。

出国前の相談内容例

- ・子どもの出国時期 ・現地教育事情、学習内容 ・学校選択 ・外国語学習準備

- ・母語の保持、育て方

滞在中の相談内容例

- ・現地での転学、進学 ・日本語力低下の懸念 ・子どもの帰国時期 ・編入受け入れのある学校

- ・統一テスト等の制度(IB・SAT・GCE等)

帰国後の相談内容例

- ・小学校～大学の学校選択 ・受験資格 ・外国語の保持 ・学校生活等の適応問題

- ・遅れている教科のキャッチアップ